

"言語"研究集団の提言

橋爪大三郎

(社会)研究者にとって、次の事実は基本的であると、わたしは思っている。

- 1° 研究者は、身体(生命)をもつて、存在している。
- 2° 研究者は、それ自身が、情報源である。

このふたつの事実によって、社会研究者を(素)粒子に喩えることができるだろう。こうしたアプローチを探るのあたりに言語研究会のごとき研究サークルの生成と死滅が従う準則を、なるべく鮮明に描きたしたいために、ほかをならね。

さて、あるサークルが形成されるとは、いくつかの粒子が相互にある特殊な関係にはいることを、いふに似ている。そこで、どのようなことが起こるのか? といふには、研究者たちのあひだにはたらく作用——粒子間力——の種類と特性とを、よくみとめておく必要がある。

粒子間力には、基本的には、似た色がない。活字と、談論と、の両方である。(あらかじめ書いてきたものを、講演においして読みあがるとかあるいは、対談が雑誌に発表されるとかあるいは、手紙のやりとりとか、いろいろの形態が"ありうる"か、といふ、口このバエモの中間的形態にすぎないのだから以下ではその存在を無視することにする。)

まず活字といふ仕方についてのみ。(活字と併列に言ったが、これは書字行直とその本質とし、グーテンベルグ以前の写本によるか、雑誌のみにとどめられるか、全く本質的なことではない。権威ある大雑誌にのりか、といふとも circulation の要のものか、全く活字の伝象的な性質である。) 研究者という粒子の存在は、この活字という波動をうみたことによつてのみ、うたえらるゝ。

あつたの活字は、ゆえに、かたがたある粒子を光源として、わたしの(わたしである)ところにやってくるのだ。研究者は、これを情報源として、せめても「報告」しなければならぬことだから、書きつかり、送信する。そのためにも、身体を用いて、それを無償に投入しなければならぬ。下手なわたしとこころに到りつた活字は、どのようにして投入された身体と、その不在を告げているのだ。

活字のもとも皮相なあらわれが知識である。知識を集積したり、右から受けとった知識を移調して左へ送りかしたりすることが、何ごと

かであるように思っている人々がいるか、といふは、社会研究とは何のかわりもなし。活字は、知識ではなく、衝撃としてうたえられるときに、知をうつす。活字は身体不在を告げるから、身体の判別的にこえて、はるかに遠隔の時間・空間へと到達あることが、できる。活字をうけとめるといふ体験は、身体的な活動である。かつたつたの情報源としてあり、いまは不在であるが、身体が「想像」によつて、賦活される。ゆえに、わたしの(わたしである)身体はかたがただ。テカルトを語るという体験は、テカルトといふ活字の光源が、テカルトといふ身体のあり方をうたえることを、知ることである。己の身体を、テカルトといふあり方に変更するにこころである。人間は自由であり、身体はさまざまの形態をとる可能性を秘めているから、己の身体を實際のあり方につくりかたることが、知の本質である。活字を受容し、理解することの真正のありかたは、こころ以外にない。イエスを知らぬは、イエスのような超脱した身体を己のみに見出すことであり、数学を知らぬは、数学のうたえられた動作を己の身体のはたらくとして見ることだ。

活字といふ粒子間力の特性は、こころが、身体と切りはなされる波動であり、度合に応じて、一方向的であり、耐久的であり、客観的であることだ。こころは、重なる波動であり、研究者といふ粒子の揺らぎを根本的に支配する作用力であるといふこと。(こころ以上の作用力はないから、こころに賭けるしかない。)

とこころが、活字からは、研究サークルという集団形成するロジックが全く出でない。こころは、サークルの如きものが、(1)身体的な粒子間力——談論——に依拠するから、である。こころがこころに、談論といふ仕方について、のらばう。

談論は、現在を共有する粒子のあひだで、双方向的にはたらく、瞬発的な相互作用力である。こころは、研究者の身体が存在するという多分に偶発的な条件に制約されるため、普遍的な仕方ではありえない。(たとえば、わたしは、わたしに可能な存続のような移行によつても、テカルトの身体と存在するおのれ場所へたどりつくことができぬのである。テカルトと談論するわけにはいかなない。わたしは、テカルトといふ身体をわたしのために体験するしかないのである。テカルトの死を知るのがある。活字がわたしの死の表象とみすむつたのは、その故である。) (かたがた(すなわち)とも)とも互いに生きてあることを確認する研究者は、互いに、他の身体の想像もかたがたあつた様に出あふことになる。他の身体は、自らの身体ではないゆえに、想像がこころに存する意味でも汲みつくせぬところであるからだ。談論の本質は、このおのれ自身の体験にあり、こころ以外にはない。談論がこ

ばしばしば自由の表裏と結びつくのは、このような理由による。(セ
ちゃん、議論が十全にその作用を發揮するためには、各粒子の身体が、充分に
知識から解放されてあり、互いに独自の、情報源としての形態をとっており、し
かも柔軟であることを要する。)

研究者も、その身体(生命)をかりて議論を交すという点で、互いの生
活音と変わらない。ただ、違いがあるとするならば、研究者は、活字といういま
ひとつの粒子間力をもつて、より広範囲の知的世界を背景としてもつているゆ
えに、各自の身体(生命)と、そのような粒子間力からの衝撃にさらされた
形態として、相互に透かしてみていること、及び、研究者自身の身体が、活字という
粒子間力を發振する1個の粒子であるゆえに、相互の活字(の交論)を、
議論の作用とみなすこともできること、の2点である。

研究者の集まるサークルは、議論という、身体(生命)の相互性の圏内にお
かいた研究者の集合という基本性格をとりおこせば、理解できない。ただし、
研究者サークルの存在が、学校制度やその他の制度的な集団化と区別
されるのは、研究者サークルが、そのようにして、組織的に、より密度の高い粒
子間力が作用する恒常的存在場としてあることによる。

議論の場である研究者サークルを生成・維持させるためには、必要な身体
の至近距離を確保するために、各自の身体(生命)の波長を調整(なげん)が
必要。(これは、制度的に同調させられている場合には、比較的容易だが、
ぶつかりあいのコストと費用は、極端な場合、活字の發振力を低下させてい
まふ。)にもかかわらず、このようなことが起こるとすれば、それは活字との関係
において生ずる。偶発的にしかたなくある粒子間力の場を形成させる
ものは、活字のみならずある。

研究者サークルのもっとも弱いかたちである読書会にも、上のような様相を
みとることが出来る。それは、ある遠隔の光源がもたらす活字——古典
——が、各自の身体(生命)の形態にどのような変調をきたすことになったかを、談
論を通じて告げられ、それを介して各自の身体(生命)の相互性を秘かに確
認するような作業である。すなわち、研究者サークルは、その議論に、活字
がもたらす重さによりいつもうつけ加えていくことにより、より強い
形へと転換してゆくことも、できる。

研究者サークルのもっとも強いかたちとは、なにか? それをわたいは、
しかたは知らないが、フロンティアアカデミーとか、アムステルダム
ストリートとか、ロマン・フォルマリストとか、フロンティア派とか、中村屋
グループとか、いろいろとある。思いつく限りいろいろある。

く、強い研究者サークルは、次のようにして存在している——その外部に対し
ては、各自が活字を發振する子であるが、己の身体(生命)の欠陥を、他の身
体のあり方を自撃おこすことにより補う。互身体性を發振源として
利用するに際し、活字の客観性と耐久力とも高めている。すなわち、
その内部に対しては、互いに、生成されたある活字を、議論の波調
にのせて、至近距離にあり他へ叩きつけ、相互の身体(生命)の形態を変化さ
せ合うことにより、情報源としての自立性を高めていく。その結果、情報
源であることが、確立される。(しかし、粒子間の相互作用力が高まることは、
一面、きわめて危険であって、ひどい場合には、タコ部屋のようなことになり
かねない。ただし、これは、本来そこにあるべき破綻が、開いたにすぎぬこ
とを、知るべきである。)

二つ、素粒子論的なことは、わかっているが、研究者のありかたを論じ、わ
かれば大方の響響(せいせい)をかたはなせが、のびのびとある。これは、わか
たしか、研究者相互のあいだには、物理法則にも似た不可抗的な力
が働いて(まう)と考へていられること、強調しなくてはならない。それがな
らぬ。研究者たちの織りなす空間は、(ちょうど生活音としての空間がど
うありうるように)いかなるいみじも民主主義とは無縁である。そこ
では、(必然的に)どんな非道いことでも、おこる。研究者という粒
子は、身体を活字へ変換し、そのことによりはじめに己の知る情報現
象をいかにあるが、身体をいかに投入し、透過のある活字をいかにして進
たらし、弄せというべきである。それ以外の場合は、強力を活字波によ
り、弾き飛ばす(沈黙)、ある活字波の場からのがれよう(かた)
(数条)、情報源であることができない(た) (翻訳屋)、... とう、
いびきの病態を常態とあることになり。最も情報密度の高いことは、
己の身体(生命)の欠陥を告げることであるが、研究という営為は、つねに危
険を伴うこと以外ではない。そうした場所では、いかにある破綻に
も、たどたどしと冷静に見向き以外に、やさしさを發振する余
地はないのである。

さて、言語(学)研究会は、その名の通り読書会から出発し、やがて強い
研究者サークルへとすみわたった。すなわち、3年目をいかにむかえるか(あり
いはむかえるのか)に関して、いま活動方針を決める所期にた
ちかかっている。わたしは、わたしは希望もあるが、これは各自決
めるべきことであるが、よく議論していただきたい。たまたま
そこには、きりきりしたおきかたいこともある。

そもそも、言語(学)研究会は、11かなん事柄いふ、2生いたのだったらうか?
1976年のはじめ、〈言語〉にこそ注目すべきだ、という直感をもった(社会)
研究者らの1群が、11たのである。その事実は、決して忘れられない。そ
の動機は、くちまをいさまごまごであったらうけれども、もし、2年間の歳月
を過ごすというのであれば、その初発の志向がどのようにたどらうとせよ、いま
はどちらを向いてのびるか、はっきりさせて当然である。直感に力を与
育した研究サークルが、己の進路を定めるためには、その直感の行く
末を簡明に示す必要は、もたないだろう。

研究者という粒子のありたには、一種の電磁誘導のような作用がほ
たらくと思う。それは、ただ、"以ているから集まらねばならない"とか、"一
人でできることでも、多勢ならなんとかなる"とかいう没論理のことではな
く、もっと微妙な相互共振と相互形成のことを考えている。〈言語〉の
直感が共有されたからと書きたた"には、人々が研究サークルをあ
えて集まり、利益をえることができる理由を、つかんだことにはな
ない。問題は、出発点である、共有された直感を原泉として置き、ここ
から各粒子が、あつちの11かに異なる方向と(加)速度をもって飛びだしてあ
るのかを、互いに確認しようことである。方向や速度の異なる原泉と
かきかへたことによるけいひが、知りえぬことである。また、原泉を共有する
以上、方向や速度の違ひは、各粒子の身体の固有性に帰せらるるだ
う。同一の出発点から始まるこの分散は、互いの「理解」を強固に
せよとする、異和である。研究者は、自己の身体にこの亀裂をみとめてし
まうことにより、己の存在(身体の一定の構造)の内、自明視してき
た部分を解任することを余儀なくされるかもしれない。

研究者がサークルを組むことにより、向きの集積効果を経験した。と
うに、異なる身体のありたにはたらく力がか、活字の共振に結びつくと
いふ場合にちがひはない。ひとつの粒子の発熱は、他の多くの粒子の異和と
いふべきを増幅し、それを発熱させるかもしれない。このように、乗数
的相互作用を、電磁誘導にみたててみたのである。

(わが国の、とて世界の)社会研究者たちの動向をみると、"〈言語〉
+1だ"と考えた人々が(ごんたに)居たというのは、大事件だ、とわたし
は思う。存在"といふ、ほとんど粒子の寿命を終るといふか、消滅
しかかるといふように、みえろから。だから、"〈言語〉+1だ"という初発
性を共有したことを、わたしは大切にしたいと思う。あまり大げま
なく、社会研究に関しては、言語研究会が世界の中心である、と考

ている。できるは、はじめの一番を、存せられて大きく育てたい——それがわた
しのゆがみである。

わたしは、言語研究会をどのように使ったのか、のべよう。わたしは、
"記号空間論"という、1人乗りの仕事を始めた。その活字(的産物)
を、まづ、この研究サークルにあって発表してみた。わたしのやり方は、活字の
現時点における伝播力という点で見ると、極小に近い。しかし、活字という波
動の生命である、果たすかは、媒体の11か人ではなし、その情報の普遍性
とエネルギーによって(た)定まるものである。だからわたしは、他の身体
がどう反応するかみだつたので、それに最も適ったやり方をしたま
である。本当をいうと、もう少々きつた反響があった文がわたしの書きたらう
が、それは雲らぬ霧沢というほどだ。要するにわたしは、科学者がサイロ
トロンのような実験装置をほしがらうように、身体の共振力が作用する
範囲内に、わたしの活字波のための実験所がほしがったのである。(もろ
く、わたしは、そこにわたしの身体を晒すこと、その責任をとる。))

研究サークルのもっとも有用な側面は、活字波のサイロトロンだ、
いまわたしは思っている。できるだけそれを失いたくない。というの
は、職に就けば、そういう機会はずっとなくなり、おどろく一生を
たどらう、と思うからだ。(理に、とくに就職したわたしの友人たち、一
様に浮かぶような音程をこぼし、そのことである。) とい、理想的
には、研求、わたしを急ぐ幾人かが、共同利用のサイロトロン
のようを、恰好で(強)研究サークルをくり、〈言語〉に用いた
大きな情報源として、活字波を共振したるべきことができよう
にわたしは、申し分ないのだ"が。(とて、"〈言語〉研究集団"
と仮称(2あ、—これは、必ずしも発振的共振を
示さず、〈言語〉派社会学(の集団)と
は、別である。) サークルには、わたしは、ad hocに設定
する発表会か、金網death match 式の dialogue を利用す
ことには、わたしは、サイロトロンにこそ、わたしは、好ま
しくはないのである。

次年度の言語研究会の方針について書けば、(誤解のない
ようにしたい)わたしは、〈言語〉研究集団への改編を主張
しているわけはない。それが可能だと、(いまは)判断して
いない。ただ、わたしは、みなさんの意向にたがうけれども、
どうにか、強引にサークルをくり、申しあげたい。と、
12.11の日の、"〈言語〉研究集団"を組むこと、いま提案した

では、どうか心に留めておいていただいたい。

「言語研究集団」のイデオロギイに同意し、ユウ、たまたま10年とかいうtime spanでいうとサードルを考慮して、そのコアになるメンバーは、互いの活字液をつねに送りあうこととし、年に1回位は、身体至近距離において、猛烈的battle royalをやる。お互い可能なら、誰かが死か昏か毎にあつまるみたいなやり方もある。

4月以降の言語研の活動は、必ずしも特定の活字液を吐き出すことと関係なくともいいと思う。しかし、ただ「言語会」の人達といふのもつまらないから、どうせやるなら、その戦果を、共同で「YUTAKU」に発表するとしておのれが約束するとか、関わり方のweightをばいませた、どうだ？

しかし、こうした外形的なことから決まるとは、決してできない。月开心の活動は、まず、各メンバーが、自己の方向とスピードをはっきり語ってやることである。なぜ、〈言語〉だったのか？ その関わりは、今後の自分の仕事のため、どの程度のweightを占めるのか？ 自分の仕事のplanは、どうな-る-2112。目標は、どうな-る-2112なのか？ 次の1年に、なにをするのか？ —— こうした点が「決断」になる。共有できる活動形態は、おのれとみえ2112である。まず、この、自己申告をみっちりやること。ユウが、言語研究会の「総括」というものだ、と思う。

言語研究会 諸氏、関係者各位

1978-4-7

CN 57
Hashizume, Daisaburo
5-9-11 Zaimokuza Kamakura 248 JAPAN